

宮崎県教育委員 県外視察報告書 (東京・埼玉)

宮崎県教育委員 島原俊英

訪問日：令和1年11月6日(水)～11月7日(木)

訪問者：松山郁子委員、松田聖委員、木村志保委員、島原俊英、北林克彦課長補佐、岸上裕昭副主幹

訪問先、11月6日(水) 東京都立小石川中等教育学校、埼玉県伊奈町教育委員会

11月7日(木) 埼玉県所沢市三ヶ島中学校

1. 東京都立小石川中等教育学校

1) 訪問の目的、下記の3点に関する調査

小石川フィロソフィーによる、6年間かけて学ぶ課題探求型学習

全国トップレベルの進学実績

SSH、教養・理数・国際教育などバランスよく身につける、グローバルリーダーの育成

2) 学校の概要

1918年 東京都立第5中学校開校(男子校)として創立

2006年 東京都立小石川中等教育学校開校

2018年 創立100周年記念式典挙行

※ 1学年4クラス160名、中高一貫教育

2019年4月4日現在、大学合格者数

東京大学 15名、京都大学 7名、早稲田大学 72名、慶応大学 38名、国公立大学計73名

38の部活動・同好会あり、部活動加入率 100%以上

3) 学校の特徴

①小石川教養主義

・広く深い知識に裏付けされた教養を育む。

全員が全教科・全科目を履修する。文理分けをしない。一日45分7時間授業。

・数学と英語の授業で習熟度に合わせた少人数授業、補修や特別講座小石川セミナー等実施

・学校図書館の蔵書 3万8千冊

②高度の理数教育

・SSHの指定を受け、日本学術会議、大学、研究所などと連携

・質の高い課題研究「小石川フィロソフィー」6年間を貫く課題研究・高度な理数教育

・週34時間、1日45分の7時間授業、

③国際理解教育

・海外語学研修、海外修学旅行、海外姉妹校との研究交流・文化交流。

・実用英語検定、2級合格率 76%

4) 所見

本校は、非常に高いレベルの学習環境を作りだしていただきました。先生方にもかなりの負荷がかかっているようだが、それよりも、高いモチベーションを創り出す、高い目標設定とやりがい、充実感をもって教育に携わっているように思った。もともと高い意欲と良い家庭環境の子供たちが選抜されて入学をしているのだと思うが、受験にむけたテスト勉強よりも、グローバルに活躍できる人材を育成するための“教養”に重点を置いた教育で、子供たちの可能性を引き出していると感じた。

その軸となるのは、6年間を通して行われる小石川フィロソフィーと呼ばれる課題研究で、課題発見力、継続的実践力、創造的思考力が、培われている。

2. 埼玉県立伊奈町教育委員会

1) 訪問の目的、下記の調査

かえる会議（教職員の改革意識の高揚）

放課後業務の削減による時間の創出

日常業務の削減（業務アシスタントの活用）

2) 伊奈町の概要

人口 44,778 人、世帯数 18,444.

町の東部は南北に古来からの広大な水田地帯を擁し、楕円状に平坦な地形を有している。

先人の遺構・遺跡が多く、町民の誇りとなっている。学校周辺には新興の住宅も多く、豊かな町であることが感じられた。

3) 伊奈町教育委員会の取り組み

文部科学省、埼玉県教育委員会委託業務改善加速事業（H29～H31）によって、

伊奈町教育委員会を中心に、全町的な取り組みで、働き方改革を推進している。

学校マネジメントコンサルタントの妹尾昌俊氏の協力を得て、平成29年から計画的に業務改善を進め、着実に実績を上げている。

その取り組みの特徴を下記にまとめる。

① 目的の明確化と共有

業務改善の目的を教育の質の向上、子供たちのための改革と明確に位置づけている。

誰のための、何のための改革か、とトップから現場まで、常に意識をしている。

また、各組織、各層で、あるべき姿について熟議を行っている。

② 強力なリーダーシップと発信し続けることによる、現場への浸透

子供達のために、先生が、学校が変わる、という強い意識を喚起している。

③ 意識の変革と改善手法の継続的实施

カエル会議によって、個人に依存せず、チームで、自立的に改善を進めている。

・目指す学校像や課題の共有

・自律的な業務改善

④ 関係者を巻き込み、学校・教育委員会・保護者・地域が一体となった改善

保護者や地域住民を交えての熟議

⑤ 実行体制の確立

業務改善プロジェクト委員会を組織

スクールサポートスタッフの雇い入れのための予算化（国・県・町、1/3づつ）

4) 感想

教育長やコンサルタントもおっしゃっている通り、トップダウンとボトムアップの両輪が必要で、そのためには、トップがあるべき姿や理想像を明確に語らなくてはいけない。

伊奈町では、学校の日々の活動の中に、改善活動を組み込むことができていた。さらには、関係する団体を巻き込みながら、町全体の取り組みとして多くの方々の力を集めていることが、うまくいっている要因だと感じた。学校の中だけで完結するのではなく、様々な形で、地域に発信がされている。世の中の変化に合わせて、学校も変わっていくための第一歩であることへの理解と、共感、そして、支援を地域全体に持ってもらうことが大事である。

外部の目を学校に置いて、客観的に業務の見直しをすすめると更に改善が進むと思われる。

3. 埼玉県立所沢市三ヶ島中学校

1) 訪問の目的

子どもたちに「確かな学力」を定着させ、総合的な「生きる力」につなげる

子どもたちに「学びに向かう力」を、つけさせる。

先生方のファシリテーション能力、「学びの場をコーディネート」する力を高める

2) 学校の概要

昭和22年4月 創立

平成8年11月 創立50周年

平成21年4月 特別支援学級設置

平成29年11月 読売教育賞優秀賞受賞

3) 学校の特徴

① 朝観賞

・確かな学力を身につける

書く力、考える力、自分の考えを筋道立てて話す力がつく

・学びに向かう力をつける

学びたい、知りたいという気持ちの芽生え、学習意欲を喚起させる

・個性・多様性・異質性をもった、一人ひとりを大切に考える考え方をもつ

② 専門教科を超えた「授業研究」

教科間連携からうまれた授業実践、協働の授業づくり

③ 異校種との連携

武蔵野美術大塚、県立芸術総合高等学校との連携による、対話型芸術鑑賞教室の設置

4) 感想

・学習指導要領で求められている「主体的で、対話的で深い学び」をどう具現化し、子供たちの思考力や想像力、構想力など総合的な力をどう高めていくか？ これまでにない、朝観賞（アートプロジェクト）という手法で、この問題に取り組んで、成果を上げつつある。

・テストの質を変える。

知識を問うより、各教科で学んだことを生かして、最適解や納得界を導き出す力を養うために、どんな問題が出るのかわからない定期テストではなく、学習内容を理解できているのかを問う「単元テスト」ことを重視する改革を行っている。

・中学生キャリアフォーラムで研修を受けた「哲学対話」とも、通じるところがある。

梶谷真司教授が提唱している「哲学対話」では、答えのない疑問に対して対話をし、自分の頭でしっかりと考え、考えたことを自由に発言し、自分で決めて、実行するということを社会に広げていかななくてはいけないと言っているが、これにつながる教育がなされている、と感じました。

・社会の変化や、価値観の多様化などに対応していくための、学校教育のあるべき姿

企業においても、与えられた課題をこなすだけの仕事のやり方から、問題の本質を捉え、自ら課題設定を行い、問題解決に主体的に挑む人材が求められている。アクティブラーニングが導入されてきたが、「学びたい」「知りたい」という気持ちを育む、主体的な学びにつなげたい。

小石川中等教育学校

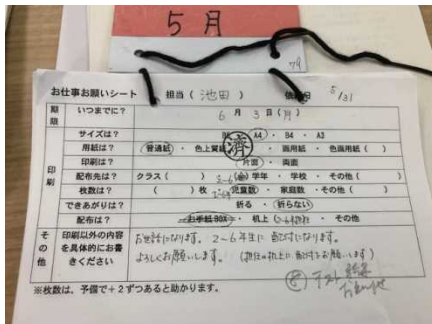


中高一貫（6年間の課題研究）

研究成果ポスター展示

図書館（調べ学習のために整備）

伊奈町教育委員会



伊奈町マップ

スクールサポートスタッフ
(お仕事お願いシート)

三ヶ島中学校



朝観察

ギャラリー（武蔵野美術館）

参考図書

県外視察報告書

松山郁子

1 東京都立小石川中等教育学校

1919年に男子中学校として創立され、2006年に中高一貫6年生学校・中等教育学校として開校された。

小石川教養主義、国際理解教育、理数教育を3つの柱とした、教職員一丸となった教育活動に取り組んでいる。特に、「小石川教養主義（小石川フィロソフィー）」に基づき、課題解決に必要な思考力や判断力の養成に重点を置き、すべての生徒が6年間を貫く課題研究型学習に取り組んでいる。

1年生と2年生の授業を参観した。1年生においては、話す、聞く、読む、書く力を身に付け、自分の意見を論理的に表現することを目標とし、オリジナルのテキストを使用した授業が行われ、2年生においては、小さなテーマを決め、グループで研究を行い、データやグラフを使用して発表が行われ、生徒も非常に意欲的に取り組んでいた。最終的な課題研究についても、生物学オリンピックや科学コンテスト、SSH研究発表会等で素晴らしい実績を上げている。

6年間をかけて課題研究に取り組むというシステムは特殊であり、大学等の外部との連携、適切な発表の場の設定や、教育する側の知識、能力や指導体制の整備も必要である。

宮崎県内に設置されている中高一貫校に関し、中高一貫という特殊性を生かした教育体制の発展、整備の必要性において学ぶところが大きかった。

2 伊奈町教育委員会

学校現場における業務改善の取り組みについて、具体的には、カエル会議、業務アシスタント等の紹介を受けた。

学校版カエル会議は働き方に対する教職員の意識改革を目的としており、その運営についても、単に意見交換等の会議を開くのみではなく、趣旨の理解、付箋の使用、発表、まとめ、話し合い、振り返りで構成されており、非常に工夫されていた。業務アシスタントについても、コーディネーター（事務主幹）の設置、リクエストシート（期限、内容、所要時間等を記載し、コーディネーターに提出し、出勤時に打ち合わせ）の利用により、各職員と連携し円滑に業務を行うことができるよう工夫されていた。

特に、業務アシスタントの活用については、現場の教職員との関係が重要であり、これらの制度は非常に参考になると考える。

3 所沢市立三ヶ島中学校

昭和22年に設置され、現在の生徒数は418名である。平成26年4月に市「学び創造プラン」研究の委嘱を受け、平成27年より、「朝鑑賞」活動を行っている。朝鑑賞とは、毎週

金曜日、朝10分間を使い、絵画等のアート作品を媒介にして教師と生徒が対話をする時間であり、思考力、自己表現、傾聴の能力を身につけることを目標としている。

校長先生のお話によれば、特に、面接演習等で、それぞれの個性に応じ、自分の口で自分のことを、自分の持っている語彙を使って組み立て、相手に分かるように伝えることができるようになってくると、評価されているとともに、指導する教師側も、答えのない授業の進め方を学んでいることも有用であるとのことであった。

加えて、各単元の学習が終了した後、単元テストが実施されており、単元ごとに理解度の確認が可能となり、生徒もより理解が深まって、学習意欲も高めることが可能となったとの報告があった。

自分で考えて自分で表現する力を伸ばす教育については、小石川中等教育学校のように、高度で体系的な教育だけでなく、朝鑑賞のような活動を積み重ねる方法もとることが可能であると知らされ、宮崎においても、活動に取り組みやすい内容であると感じた。

以上

訪問日：令和元年11月6日（水）～11月7日（木）

訪問者：島原委員、松山委員、松田委員、木村委員、北林課長補佐、岸上副主席

訪問先：11月6日（水）埼玉県伊奈町教育委員会

1 伊奈町概要

人口 44,862人

児童生徒数 4,590人 県費負担教職員数 222名

小学校 4校 中学校 3校（他に県立中学校1校あり）

2 伊奈町教育委員会が取り組む教職員の働き方の改善・改革について

(1) 今までの主な流れ

平成29年度から、文部科学省、埼玉県教育委員会の「学校現場における業務改善加速事業」委託を受け、今年で3年目

1年目：「管理職のマネジメントとリーダーシップ」・・・①

「教職員の意識改革と業務改善」・・・②

2年目：「保護者・地域住民の意識改革、連携」を上記①、②に追加

3年目：「学校・教育委員会・保護者・地域が一体となった業務改善」

「キャリア段階（勤務年数）に応じた働き方モデルの確立」

「新しい働き方を見据えた管理職、教職員のさらなる意識改革」

(2) 委託を受けた当初の伊奈町教職員の勤務時間等（平成29年6月調べ）

① 勤務時間を除く在校時間（1日あたりの平均時間）

小学校 3時間05分 中学校 3時間11分

② 過労死ラインを超えている伊奈町教職員

小学校で、37% 中学校で、60%

(3) これまでの主な取組と成果（課題）

① 業務アシスタント（スクールサポートスタッフ）の全校配置

・拠点校で勤務時間を除く在校時間を20%（約40分）削減しようと改善目標を立て、11.7%（24分）（令和元.6）を達成。

② カエル会議（早く帰る、仕事のやり方を変える、人生を変える）

・子どもと向き合う時間の確保、教材研究や授業準備の時間確保等については、15.8pt向上（令和元.7）

・年次休暇が取りやすい環境：拠点校で9%増

③ 部活動指導員の配置（3名配置）

・中学校での超過勤務解消や教師の本来の業務である学習指導や生徒指導に専念できるので有効ではあるが、人材の確保が難しい。

3 感想

教員が本来の業務である「子どもたちと向き合う」時間の確保を図るため、学校現場における業務改善の取組を、一体的・総合的に推進するために町教育委員会と7つの小中学校が一緒になって懸命な努力をされていた。

説明の途中で「働き方改革」の取材ビデオ（NHK,H30,11月29日放送）を見せてもらったが、業務アシスタントの配置や業務の見直しで残業時間が減ったという報告の後、学校現場の声として小室小学校、加藤校長の「ここから先は厳しいかなと思います。子どものことを考えると、どうしても削れないことがたくさんあるので、厳しい部分もあるなと思っています。」という言葉が印象的であった。

業務の削減と同時に教員数の増加を実施しなければ「公立学校の教師の勤務時間の上限に関するガイドライン（文部科学省）」で規定された「原則月45時間内、年360時間以内」の達成は難しいと感じた。

県外視察報告書

R1.11.6(水)～7(木)

報告者 木村 志保

【埼玉県所沢市立三ヶ島中学校】

1 学校の概要

《生徒数》

418名（1年生 129名， 2年生 142名， 3年生 137名， 特別支援 10名）

《学校教育目標》

- 1、自ら学ぶ生徒
- 2、心豊かな生徒
- 3、たくましく生きる生徒

2 学校の特徴

① 朝鑑賞

朝学活の前(8:30～8:40)の10分間を使い、毎週金曜日の朝、担当の教師が絵画等の作品を各教室に持参し、全校で対話型芸術朝鑑賞を行うという取り組み。

② 単元テストと定期テストの二本立て

学習内容が理解できているか確認するために、ひとつの単元が終わる度に「単元テスト」を行う。そして学期毎に定期テストも行うがそのテストも、単純に答えを出すだけの問題ではなく、理解した知識を活用しながら、生徒が自ら考えて答えを導き出す内容となっている。

3 感想等

① 朝鑑賞について

まず朝鑑賞を開始するきっかけとなった「黒板ジャック」という鑑賞授業がとても印象に残りました。この授業で生徒が作品を見ながら、思ったこと感じたこと等を、積極的に発言する姿を見て「考えたこと」を「自分の言葉」で表現する方法として美術鑑賞は有効であると考えたそうです。そしてこの取り組みの中で教師は、控えめな子や言葉は発してないが考えている生徒への配慮や、マナー化を防ぐために毎週異なる教師がファシリテーターになるように、教師全体で取り組む工夫をしているとのことで、そういった試行錯誤が教師の資質を向上させていると感じました。また生徒も周りの様々な意見を聞くことで、自分と他者の考え方の違いやそれを認める寛容さ、相手の意図をくみ取る観察力等の能力が身につけているのではないかと思います。

この答えのない美術作品を見て感じたことを口にする、そしてその言葉を聞き「どこからそう感じたのか」と根拠を問う朝鑑賞は、生徒たちの探求心を深め、自分の発言に自信をもたせることができるとても有意義な取り組みだと思いました。

② 単元テストと定期テストの二本立てについて

単元テストの導入は、本当にその単元が理解できているかを確認する方法として、一番有効で、理解できていない生徒にすぐ対応できる点でもとても良いと思います。また定期テストも単に知識を問うものではなく、事前に問題が提示されていたり、答えが間違ってる式のどこが間違ってるのかを説明させる問題等でした。その際、パソコンで調べてきたものや資料の持ち込みも許可されており、それらを使って考えた答えを書くというテスト方式で、従来のただ暗記してきたものを記入する問題とは大きく違っていました。

これらのテスト問題のあり方を考え直すことが、生徒の学習意欲向上や、学ぶことの楽しさを実感できることに繋がるのではないかと思いました。